

柿本人麻呂の人間観

— 近江荒都歌を中心に —

小谷俊博

一、序

日本古代において、人間はどのような存在者として規定されていたのか。この人間観の探求が、日本古代の倫理を探求する上でも重要な問題であることは明らかであろう。本稿は、この問いを明らかにするために、万葉歌人の一人である柿本人麻呂の人間観を探求する。

本稿では、一般に「近江荒都歌」と呼ばれる作品を検討する。これは、『万葉集』の巻一・二九〇―三〇一の歌群を指す。この歌群の検討を通して、そこから見いだされる人麻呂の人間観を明らかにしていくことが目的である。

本歌群を選んだ理由は、巻一の配列の仕方等から、近江荒都歌が、宮廷歌人としての人麻呂の出発点にあたると思われるからである¹⁾。人麻呂の作品の範囲や制作年代については、容易に解決できない問題があるものの、昨今の人麻呂研究の成果として、人麻呂作品は少なくとも、題詞に人麻呂作を明記した「人麻呂作歌」と、人麻呂の名を有した歌集「人麻呂歌集」の

歌の二種がある。そして、両者の表記の特徴から、人麻呂歌集歌→人麻呂作歌の順に、人麻呂自身の手で制作されていたと考えられる²⁾。とするならば、「人麻呂作歌」の最初期にあたる当該歌群は、人麻呂作品全体を通して見たとき、人麻呂歌集歌と人麻呂作歌の転換点をなすものと考えられ、人麻呂の思想全体を見通すのに、適した作品と考えられる。なお、この作品の思想的意義は、右に尽きるものではない。次節で、まずこのことを明らかにしなければならない。

二、近江荒都歌と羈旅信仰

近江の荒れたる都を過ぐる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌
玉たすき 歌傍の山の 榎原の ひじりの 御代ゆ或いは「宮
ゆ」といふ 生れましし 神のことごと 梅の木 の いや
継ぎ継ぎに 天の下 知らしめししを或いは「めしける」とい
ふ そらにみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越
え或いは「そらみつ 大和を置き あをによし 奈良山越えて」とい

ふ いかさまに 思ほしめせか或いは「思ほしけめか」といふ
天離る 鄙にはあれど 石走る 近江の国の 楽浪の 大
津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の命の
大宮は ことと聞けども 大殿は ことと言へども 春草
の 茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れる或いは「霞立つ
春日が霧れる 夏草か 茂くなりぬる」といふ ももしきの 大
宮どころ 見れば悲しも或いは「見ればさぶしも」といふ (卷
一・二九)

反歌

楽浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 舟待ちかね
つ (卷一・三〇)

楽浪の 志賀の一には「比良の」といふ大わだ 淀むとも 昔
の人に またも逢はめやも 一には「逢はむと思へや」といふ
(卷一・三二)

右の歌群は、題詞にもあるとおり、荒廃してしまつた近江の都を通り過ぎたときに、歌われたものである。「樞原」は、神武天皇が即位した場所であり、「樞原の ひじりの御代ゆ」は、初代神武の御代以来、という意味になる。よつて、二九は、神武以来、神である天皇が大和の地で天下を治めてきたのだが、どのように思つたのか、天智天皇は大和の地を離れて近江に都を移してしまい、その都は今や荒廃してしまつたと嘆く内容となつてゐる。三〇は、楽浪の志賀の唐崎は昔のままにあるが、ここで遊んだ大宮人の船はいくら待つても待ち受けることがで

きない、という意味で、三二は、楽浪の志賀の大わだは淀んでいようと、ここで昔の人に会うことができようか、いやできない、という意味になる。

この歌がどのような思想的意義を有しているのかを明らかにするために、まずはなぜこの歌が歌われたのか、ということを確認しなければならぬだろう。

人麻呂作歌の場合、題詞の形は二種に分類できる。一つは、「作歌事情十作者名十作歌」で、もう一つは「作者十作歌事情十作歌」である。本歌群は前者にあたるが、これについて伊藤博^③は、前者の場合は、作歌事情が作者だけに限らない場合、後者は作歌事情が作者にのみ関わる場合であることを明らかにした。これを踏まえるならば、当該歌群は、作者だけには限らない作歌事情が存することになる。宮廷官人である人麻呂が、滅びた都を主題とするわけであるから、当然ながらその背景事情には、持統天皇を中心とした宮廷社会の関与が想定される。では、具体的にはどのような形で関わるのだろうか。

伊藤^④によれば、古代人は、旅の途中で、ある場所を通過するとき、そこにあるものを見て鎮魂の歌を歌う習俗を有していた。その鎮魂歌は、いくつかの種類を有するが、その一つには、滅んだものを歌い、その靈魂を慰めることで、生命力の充足を願ひ行路の安全を願うものがあつた。この古代日本人が有していた禰旅信仰が、この歌が歌われた背景にある。すなわち、宮廷官人の集団が近江を通り過ぎることがあり、そのときこの「荒れたる都」は、鎮魂の対象としては避けられぬものであつ

た。まして、この都は、持統天皇の亡き夫である天武天皇によって滅ぼされたもので、さらにこの荒都の主は、持統天皇の父である天智天皇である。こうした背景を有するがゆえに、当該歌群は歌われざるを得なかつたと考えられる。

以上の考察から分かることとして、まず当該歌群が、人麻呂の個人的な感懐を歌うようなものではなく、宮廷集団の要請として歌われたものであることが挙げられる。そして、その歌が『万葉集』という歌集に残されたということは、宮廷社会にその思想内容が受け入れられているものと考えられ、それゆえに当該歌群の検討は、人麻呂個人の思想としてのみでなく、当時の宮廷社会において共有されていた思想の探究としての広がりを持つものとも認められる。さらに、羈旅信仰による要請が存在すると見るならば、人麻呂を含めた宮廷集団がこの地を通らなければ、この歌は存在し得ず、いわばある種の偶然のもとに歌われた作品と見ることもできる。すなわち、近江荒都歌は、予定調和的に天皇の絶対性を示し、讚美するという宮廷社会の論理が展開されているのではない。

諸家の指摘にあるように¹⁵、この歌は、「荒都」を主題とした我が国最初の作品である。しかもこの「荒都」は、神によつて営まれたものであつたのにも関わらず、滅びてしまつたのであり、単純に宮廷社会の論理を適用することが困難な題材である。いわば、「不滅」と「荒廢」という相反する性質が共存した主題に対して、あくまで宮廷歌人として歌を詠んだのである。既存の宮廷社会における価値体系を単純に適用するだけでは、

歌として成立し得ないことは容易に想像しうる。つまり、近江荒都歌という作品に提示される思想は、人麻呂独自の思想であると同時に、揺るがすことのできない宮廷歌人としての根本思想であつたと言える。近江荒都歌を検討する思想史的意義として、以上を踏まえておく必要があるだろう。

三、「いかさまに 思ほしめせか」

本稿は、近江荒都歌を思想的な見地から解釈することにより、人麻呂の有する人間観を明らかにすることを目的とする。そこで、歌の内容全体から、そこに内在する思想を検討しようとするならば、近江荒都歌論の一つの焦点である、「いかさまに 思ほしめせか」をいかに解釈しうるか、という問題を避けることはできない。

「いかさまに 思ほしめせか」の解釈は、二つに分類される。その二つともが、すでに契沖の指摘するところである。契沖は、「イカサマニオホシメシテカト云にヨリテ見レハ、此帝ノ都ヲ遷シ給フ事ヲ少謗レルカ」¹⁶と述べるが、また「只御心ノハカリカタキヲ云ヘリ」¹⁷とも述べている。どちらの解釈が妥当であるだろうか。

解釈は、あくまで歌に即して問われなければならない。「いかさまに 思ほしめせか」は、この長歌の中で意味を持つからだ。本発表は、この問題に対して、天智天皇が歌の中でどのような存在として描かれているかに注目して、解決を試みる。ま

ず確認するべきは、「神の命」という表現である。岡内弘子¹⁸⁾によれば、記紀・万葉に現れる「命」は、その用例がすべて神に關係している。その中でも用例の多い「神の命」は、まさに神に対して用いられる表現である。すなわち、この表現を用いる対象は、「神」として認識されている。

さて、二九における「神の命」とは、天智天皇に他ならない。すなわち、荒部の主は神として認識されているのである。その神たる天智は、これまでの天皇たちが大和に都を置いていたのに対して、「天離る鄙」の近江の地に都を移したのである。

同時に考慮すべきは、神武以降の皇統が強く意識されている点である。このことは、以下の坂本の議論により補強される¹⁹⁾。坂本は、過去時制の用いられ方に注目し、まず以下の事実を指摘する。すなわち、神武に關わる時間は「生れましし」「知らしめしし」と助動詞「き」に統一されているが、天智の治世の場合には「知らしめしけむ」と助動詞「けむ」が使用されている。また、「いかさまに思ほしめせか」も異伝では「思ほしけめか」とある。「けむ」は、伝聞の形で過去を表す助動詞である。坂本は、「き」によって表現される過去は、直接的に今とつながる過去であるのに対して、「けむ」によって述べられた過去は、「今」とは根本的に異質な伝承の時間であると主張する。

だが、この坂本の主張には問題がある。それは、「思ほしめせか」の異伝についてである。人麻呂において「或云」と表記される異伝は、初案を示し、本文がその推敲した表現であると考えられる。すなわち、人麻呂はこの「思ほしけめか」という

表現を改訂し、それを最終稿としたのである。この点を踏まえれば、むしろ人麻呂はここで、あえて天智と現在の連続性を表現したと言えるのではないか。

天智治世との連続性が確保されなければ、その後半、あるいは反歌で歌われる「大宮人」への悲しみも意味を失ってしまうし、そもそも荒部歌を歌う意義も薄れてしまう。天智は間違はなく、現在に直接つながる天皇であり、これまでの天皇と同様に「神」である。そうであるならば、宮廷歌人たる人麻呂において、この神は、当代の天皇持統と同様に、絶対的な存在として見られたと考えなければならぬ。宮廷歌人は天皇を中心とする宮廷社会によってのみ、その地位が保証されるのであり、後の歌にも示されるように、常に天皇は讚美の対象であるからだ。それゆえ、「いかさまに、思ほしめせか」という表現は、ただ、神の営為に対して、凡慮にははかりしれないものを看取し、それをあえて言葉で表現した帰結であつたとすべきである。

四、神話と統治

以前の天皇が嘗んだ都の荒廢を目の前にし、それでもなお、その天皇を神と称さざるをえなかつたという事実、神の絶対性、不滅性と「荒部」とは、相反するもの同士の組み合わせであり、それを認識しつつもなお、そう歌わざるをえなかつたという事実、そして、当代の天皇である持統天皇を絶対的な存在として崇拜し、かつその現在と天智との連続性をあえて表明せ

ざるを得なかつたという事実、これらはすべて、天皇による統治は、神による統治に他ならないという論理を絶対に放棄し得ないという、人麻呂が有していた根本思想によるものだと考えざるをえない。

さて、人間観の解明をあくまで探求する本発表としては、この神話と統治の結合が何を意味するのかを論じなければならぬ。問題は、なぜ天皇Ⅱ神でなければならぬのか、ということとである。そこにはすでに語り継がれてきた神話があるだろう。

しかし、右に論じたように、ことさらに神であることを歌い出さなければならぬ理由、逆に言えば、人であってはならない理由には、それだけでは明らかにならない。仮に神話の存在のみをもつて、この人麻呂の態度を説明するのなら、神話が絶対的な規範として意味をもつていなければならぬ。だが、草壁皇子への挽歌(巻二・一六七―一七〇)で、人麻呂は、天降る神を、記紀に伝えるニニギではなく、天武天皇としている。すなわち、彼は語られてきた神話を改訂しているのである。神話の絶対性に依拠して論を進めることは困難である。

解釈の糸口は、人麻呂にとつて、神とはどのような場面で要請されるのか、ということにあるのではないか。たとえば、以下の歌にあるように、当時無事を願うのに、ことさらに神を持ち出すことが認められる。

柿本朝臣人麻呂が歌集の歌に曰はく
葦原の瑞穂の国は 神ながら 言挙げせぬ国 しかれど

も 言挙げぞ我がする 言幸く ま幸くいませと 障みな
く 幸くいまさは 荒磯波 ありても見むと 百重波
千重波にしき 言挙げす我れは 言挙げす我れは
(巻十三・三二五三)

反歌
磯城島の 大和の国は 言霊の 助くる国ぞ ま幸くあり
こそ (巻十三・三二五四)

右の作品は、人麻呂歌集歌であり、人麻呂自身の手によると考えられる。これら二首が詠まれた時期については、容易に解決できない問題が存するが、表記論の立場から検討した稲岡耕二の説¹¹⁾によると、他の人麻呂歌集歌と同様に「人麻呂作歌」以前の、よつて近江荒都歌以前のものと考えられる。長歌は、この瑞穂の国は、神の神意のままに言挙げなど必要としないが、あえて言挙げする、とうたう。反歌は、この大和の国は、言霊が幸いをもたらす国である、と歌う。幸いの実現のために、なぜあえて言挙げするのか。伊藤益によれば、そこには、人麻呂の生きた時代は神意が十分には貫流していないという認識があり、それゆえに、「声高な言い立て(言挙)によつて神意の発動を求めざるをえない¹²⁾」と人麻呂が考えたからである。当該歌群は、何らかの遣外使の無事を祈つて歌つたと考えられるが、重要なことは、この航海の無事は、人の力ではどうにかできるものではないということだ。それゆえに、言挙げし、人の力をはるかに超越する神のはたらきかけを願う。この場面でこそ、

神が要請されるのである。

以上の議論から明らかのように、神の威力の前では、人はきわめて矮小な存在でしかない。統治の正当性を求めるとき、統治者が人である限りは、その矮小さから逃れることはできない。また、統治を正当化するためには、その統治が未来の繁栄を約束するものでなければならぬ。それは、もはや人には不可能である。統治者たる天皇を神とみなすのは、こうした現実の要請も関わったと考えられる。

ここから見いだせるのが、人間存在に対する消極的な視点である。神を前にしたときに見いだされるこの消極的な性格は、自然と対比するとき、より際だつて見える。

五、自然と人の関係

二九の後半は、神の都であつたはずの大津の宮が荒廃してしまつたことへの悲しみが歌われ、反歌に展開されている。悲しみの対象は、荒都という主題から見れば、今も栄えていて然るべき都が減んだことへの悲しみであるが、反歌二首を見れば分かるように、これは都それ自体ではなく、都にいた人々への悲しみである。すなわち、かつて都で生を営んでいた人々が、都の荒廃によつて姿を消してしまつたことを悲しんでいるのである。

このかつての「大宮人」を悲しみの対象として歌い込んだ背景として、人麻呂自身が天津の宮に出仕していた可能性がある。

人麻呂の生年について、確かなことを言えるだけの史料は存在せず、これは可能性の一つである。これによれば、ここで歌われた悲しみは、見知つた人と会うことができないう悲しみとすることができよう。

しかし、この解釈は妥当ではない。私たちが確認したところによれば、この歌は宮廷集団の一行が近江を通る際に歌われたものであつた。仮に人麻呂が近江の都の官人を見知つたとして、その個人的な親しみ、悲しみが、宮廷社会を代表して歌われた作品の主題となりうるだろうか。ここには、個人的な感懐とは異質の、人間一般に対する悲しみが歌われていると見るべきである。事実、以下に挙げる作品のように、人麻呂は人間の無常を見つめ、悲しむ歌をすでに残している。

み吉野の 三船の山に 立つ雲の 常にあらむと 我が思
はなくに (卷三・二四四)

子らが手を 巻向山は 常にあれど 過ぎにし人に 行き
まかめや (卷七・二二八八)
巻向の 山辺響みて 行く水の 水沫のごとし 世の人我
れは (卷七・二二八九)

右三首は、いずれも人麻呂歌集歌である。二四四は、山に湧き立つ雲、二二八八は巻向山が恒常的であるのと比較する形で、人の無常を歌っている。二二八九は、「世の人」である自分、沫のようにはないものだと言歌う。これらの歌に明確に示され

た無常の認識は、哀感を伴うものである。こうした人の無常を知るという事態は、具体的な人の死を経験し、その悲しみを知ることこそ生じる。

黄葉わづらひの 過ぎにし子らと たづさはり 遊びし磯いそを 見れ

ば悲しも (巻九・一七九六)

潮気うしき立つ 荒磯あらいそにはあれど 行く水の 過ぎにし妹が 形

見とぞ来し (巻九・一七九七)

いにしへに 妹と我が見し ぬばたまの 黒牛くろうし澗がたを 見れ

ばさぶしも (巻九・一七九八)

玉津島たまつしま 磯の浦うらみの 真砂まなごにも にほひて行かな 妹も触

れけむ (巻九・一七九九)

右の四首は一群で、妻を失った悲しみが歌われている。「黄葉の 過ぎにし子」や「行く水の 過ぎにし妹」という表現から明らかなように、人の無常が自然にたとえる形で表現されている。これは、先に挙げた人麻呂歌集歌三首も同様である。自然を通して見た人麻呂の人間観には、無常という性質が根本にあったと言える。自然は人間の無常を明確化するために恒常性の象徴として描かれたり、あるいは無常をたとえるための対象として描かれたりするが、根本には、人間の無常を明確化する役割を担っている。いわば、自然は、人間の無常を映し出す鏡であり、無常の表現のための媒介である。

以上を踏まえれば、近江荒都歌において悲しみの対象とされ

たのは、自然と対比されてこそ明らかになる、人の無常という宿命であったと考えることができる。また、神との関係でも結論されたように、人間に対しては、きわめて悲観的、ネガティブな面に目が向けられている。

六、結語

本論をまとめると、近江荒都歌から解釈しうる限り、人麻呂の人間観は、無常観を基調とする、ネガティブな視点から捉えられたものであった。神との関係においては、人はその力のなさを露呈し、自然と対比することで、時間的に限界づけられた存在、すなわち存在の根底にある無常という事態が焦点化された。ただし、以上の結論は、あくまで近江荒都歌に焦点を当てた上での結論であることには注意しなければならない。本作品の検討を通して明らかになった人麻呂の人間観が、どのような変遷をたどるのか、そして、この人間観からどのような倫理観が導かれてくるのかを、今後の課題としたい。

注

(1) 伊藤博『萬葉集釋注』参照。

(2) 表記論については、稲岡耕二『万葉表記論』(瑞書房、一九七六年)を参照のこと。なお、人麻呂歌集歌の中には、さらに助辞を比較的省略する「略体歌」と省略しない「非略体歌」が存在し、稲岡は「略体歌→非略体歌→人麻呂作

歌」の順に歌い継がれていったとする。

(3) 伊藤博『万葉集全注』参照。

(4) 伊藤博『万葉集の歌人と作品 上』(瑞書房、一九七五年)。

(5) たとえば西郷信綱『万葉私記』(未来社、一九七〇年)など。

(6) 契沖『万葉代匠記』(精撰本)

(7) 同右

(8) 岡内弘子「『命』考―万葉集を中心に―」(『万葉』二二〇号)

(9) 万葉集中「―の命」の用例は三十五例あり、そのうち「神

の命」は十一例存する。

(10) 坂本勝「近江荒部歌・近江歌」(橋本達雄編『柿本人麻呂(全)』

笠間書院、二〇〇五年、所収)。注意しなければならないが、

坂本は、本稿とは逆に、天智の治世を、現在と断絶したも

のとして捉えるべきとする主張のもとで、この議論を展開

している。

(11) 『王朝の歌人 1 柿本人麻呂』(集英社、一九八五年)

一四五―一四六頁。

(12) 伊藤益『ことばと時間』(大和書房、一九九〇年)、八〇―

八一頁。

※本発表は、日本倫理学会第六一回大会で口頭発表された原稿
を基にしている。

(こたに・としひろ 筑波大学大学院

人文社会科学研究所)